

には薬は入らない、與ふるには不請の慈悲も與へねばならぬ、不蓋の慈悲も布かねばならぬ、無縁の慈悲も施さねばならぬ、或は苦に入り毒に入り、自ら地獄に入っても、罪人は救ひ出さねばならぬ、悲智圓滿の神の前には律法的の地獄もない、應報的の輪廻もない、十惡五逆謗法闡提の非器までも、十方微塵世界は、悉く攝取して、盡きざるを阿彌陀佛と名けるのである、一切を救ふことが不可能ならば、自ら正覺は成らずと誓つた神である、この絶待至上の神と、善惡判別の神とは比べものにならぬ、常識で考へてもこの通りである、唯佛與佛の神の知見から見たら、差別的の判官思想は、神と云ふ境界には恐らくあるまいと思ふ、そこで判官思想を固持して居るヤソ教はまだ、餘程進化せねばならぬ運命をもつて居るのである、判官的神格は最後の理想神格ではない、(是三) まだ、通佛教的の教義と比較すれば、消極的に佛教の高尙なる所以

も明白になるが、今日は親鸞聖人の教義に、直接關係ある點に止めて置きたい、こゝに示した祈禱天國判官の三點は、反射的に、聖人の平等主義を顯はすものであつて、不平等の願心、不平等の果位、不平等の審判は、之を平等の攝取、平等の正報、平等の禁祈禱主義に比すれば、聖人の主義の純一で一律なるとが明證し得られるのである、聖人は實に平等主義の權化として仰ぐべき人天の大導師である、以上述べたる所を一括して見れば、聖人の見地の明白なるその思想の健全なるその間に一點の迷信を許さず、一片の疑問を残さざる實に純淨无垢の宗教であつて、將來に於て永久的勢力を維持し得べき教義である。

#### 四、佛教生活の理想

(報治三十六年十月  
高輪學報)

本學年に於ける佛教青年會の初會に於て、平生見て以て將來理想の宗教となせる所を述べんとするは、尤その時機を得たるものなるを信したるに基けり、抑、各宗合同なる理想は久しく教門の一大問題にして、而も實際に於て決して解決せられざるの疑問なり。今かくまでに別れかくまでに差違ある各宗派をして同働一致の事業に當らしめんとするは、言ふべくして遂に行ふべからざるの理想たればなり。されど、各宗合同は無上の理想たるを失はず、宗教經世家の尤希望する所たるは言ふを待たざるも、これを世に實現せしめんと欲せる計畫は常に失敗に歸し、識者の憂慮を買ひたること一にして足らず、而るにこの佛教青年會は各宗の青年相合して宗教生活に於て同一の理想に進まんとするものあり、若しこの間に於て一宗一派の特別教義を骨張し、他と相容れざることあらば、是れ青年會の目的に背くものにして、青年會は自然

に「各宗合同」の理想を實踐せざるを得ざるの地に立てり、故に青年會員が常に相計りて以てその主義となし、務めてその實行を期すべき事項は大凡左の如くなるべし。

- 一、各宗派に共通する所の教義、方軌を求めて、務めて之が互用を期すること。
- 二、史的攻究の結果を利用して、務めて佛在世時代、立教の精神に還向すること。
- 三、各宗別途の宗義は各祖師の佛教中に於ける新發見に屬す、故にその優勝の處を求めて、務めて之を相互實用に供すること。
- 四、從來の解釋に依り佛の正意の誤認せられたるものあること、佛の正意の尙隱蔽せられたるものあること、この二事を信し、務めて隨自意の解釋を試むること。

我々若し一たび以上の精神を以て佛教を宣説するの自由を得、佛教を實踐するの標準となさば、聖淨二門の差、顯密二教の異を打て一丸となし、悉く相融和して所謂理長爲宗的の新宗教を實現するを得べし、今その解釋に依りて取捨の差を生ずべき實例の一二を擧げて、その希望する所を述べんとす。

三學は諸宗を通じて尤樞要なる教義にして、佛の根本教義の一たり。是所謂三毒の煩惱に對して宣説せるものにして、人間の須臾も離る可らざる教訓なり。

貧慾、瞋恚、愚痴の三毒を治むる爲、戒、定、慧の三學を教へしものにして、戒を以て慾を對治し、定を以て瞋を治め、慧の運用を以て愚痴を拂ふ、所謂三學の林に入らずんば誰か菩提の果を證せんと云へる如く、尤樞要なる法門なり、されど淨土門に於ては全く之を棄て以て常人の企及し能

はざる所となせり、若し之を初地以上の理觀より見るときは三學の奧義は到底通常人の履踐すべからざる所たるも、今之を開き之を和げ、積極的に之を説かば、戒は正語、正業、正命の三なり、消極的に之を述べれば不殺生、不偷盜、不妄語、不邪淫、不飲酒なり、人間誰か之が實踐を憚るものぞ、たとひ佛の教法ならざるも、何ぞこの訓戒を守る能はざるの理あらんや、誰か敢て之を排斥し得べきものとなさんや、淨土門に於ては之を以て出離生死の正因となさんとするを排するも、之が實踐に於て素より異議あるべからず、定は正治、正念、正定の三正道にして、慧は正見、正思、惟の二正道なり、この正道の實行も亦更に異論あるを見ず、如此解し來れば、戒は日常生活の訓戒にして、社會の慣習と紀律と徳義とに背かざるを云ひ、定は精神修養の正路として、心を攝し、意を専らにし、諸般の考察力を養ひ、一生持續し得べき恒心を養ふを云ひ、慧とは天與の慧能を發

揮する運用力にしてその見地を正しくし、その理想を高くし、迷信を去りて健全の信仰に歸向し、常に常識の指示により事を處するを云ふものなれば、我々日常生活に尤必用にして精神修養に於ては、缺く可らざるの正道なり。

十二因縁は佛の人生觀の思索的順序を示し、四聖諦は佛の教義の哲學的組織を示し、八正道は佛が積極的に宣説せる倫理の標範なり、佛が消極的禁戒として教へ機に應じて説きたる大小の説法は、多々なりと雖、廣く一般の依用すべき中樞の正道として宣説せるは、唯この八正道あるのみ、八正道とは何ぞや。

慧

正見 迷信を去り、空想を排し、正き見地に住するの謂  
正思 如法如實にして、信念相應し、その理想を高くするの謂

戒

正言 公平、眞實、愛意を以て、言説をなすの謂  
正行 清淨、平和、方正の行爲あるの謂  
正命 他人を損し、他の生物を害せざるの生活を爲すの謂

定

正治 常に自省の意を持ち、猛勇奮進の心を存するの謂  
正念 一心專念にして、自の地位を自覺し、その守る所を念持するの謂  
正定 靜慮にて、事物を伺察し、極めて完全に考覈し、根底より斷定を下し得るの地を爲すの謂

是れ佛説の所謂八正道なり、私欲私情の發現たる世間的生活の俗道にも非ず、苦行苦悶の集合たる外道的生活の危道にも非ず、平易明晰何人も實踐し得べき不偏不局の中道なりと説けり、是れ實に佛教生活の理想にして、個人修養の標範たるものなり、各宗各派老若男女共に履修し

得べきの大道なり、之を以て單に小乘に限れるものと考ふるは是れ實に外道的偏見なりと謂ふべし。

釋迦の八正道は初轉法輪の時に説きたるものにして、彼の「五群比丘」と稱せらるゝ尊者了本際以下五名はその簡易にして理を盡せるに感し俱に佛門に歸したるものなり。

以上は今此に一例として挙げたるものなるが、之を佛教青年會の理想として佛教青年の模範生活を建設せんことを希望して止まず、その説く所如何に高遠なるも、その行ふ所賤劣なるは人格の尤憎むべきものにして、宗教者の俱に戒むべき所たり、故に將來の宗教として學界に評判あるべく夢想せられたる理論宗の如き空論的新傾向を生ずる如きことあらば、佛教は實に個人の修養に益なく、社會の實用に適せざるに至るべし、八正道の如き善美俱に備はれるの福音を棄て、佛立教の精

神を没却するは、自その宗教を破滅するものなりと謂ふべし、凡そ信念なく、實踐なき宗教は社會に生存するの權利なきものなり、我國佛教の弱點は常に議論に馳せて信仰冷却せるの一事に在り、こは佛在世よりしてその淵源する所あり、以てその然るを致せしものなり、佛は凡べての人間以上の神格を非認し、諸天諸神は人の生活、生命に向つて寸毫の支配力なきものとし、神の天啓に係れりと云ふ吠陀經を排斥し、唯各自自證の菩提に依りて眞解脱を得べきを説けり、外國の弟子信者は悉く佛の人格を慕ひ來りて佛に隨從せるものにして、その拜するは敬禮にして禮拜に非ず、香花を獻せしは敬愛の至情に出で、その神格に奉せしものに非ず、佛前に讀經する如きは佛の在世に於てあるべき理なく、行住坐臥悉く恩師に對するの待遇にして、師の覺者たるを知るも之に對し神格視したることなく、佛涅槃後は如何なり行くやと問へるもの

すらあり、その間實に師弟同和の一團あるのみなりき、而るに耶穌は自稱して「我は神の子なり」と云ひ、聖靈の宿る所、神の應現體なりと云ひ、その在世に於て神たるの觀念を與へ、弟子は之に對して自ら宗教的奉祀の念を帯びたるは掩ふべからざる所にして、弟子の之を拜するは敬禮よりも寧ろ神に對するの禮拜なり、生前に奇蹟あり、死後に再生のことありしより益その神格を高め、三位一體を以て信仰の要件とするに至れり、一言にして之を云へば佛は人格として尊崇せられ、耶穌は神格として禮拜せられ、佛敎は智識本位にして無上智に進むを以て、人間の大事とし、耶穌敎は信仰本位にして唯一神を拜するを以て要件となす、即佛敎は智識の敎にして、耶穌敎は信仰の敎なり、故に今に到りて尙この傾向を生じ、佛敎者は常に智識研鑽に傾き易く、耶穌敎者は信仰祈念に偏し易し、耶穌は尙神の如くに拜せらるゝも、釋迦牟尼佛は、今各宗に於

て之を拜するもの少きに至れり、この弱點に代ふる爲他佛を拜し、之に對して祈念信仰の禮を盡せるものあるも、釋迦を以てその本尊とせるは至りて少きなり、その拜する所はたとひ何れの佛たるも、その實踐する所は釋尊の正法たらんことを希望して止まざるなり。  
かゝる高尚の教義かゝる美麗の眞理を得て、而して徒らに偏僻の見解を以て之を損滅し、之を墮退し、遂に之を破滅せんは實に忍ぶべからざるの所作なり、願くは佛當時の本相に返へりて、十二分の攷究を經、その長所を發揮し、佛法光讚の本務を盡さんことを切望の至りに耐へず。

### 五、佛敎清徒の任務

(明治三十三年九月)  
新佛敎

眞個の預言者世に出でず、信仰の中心會て定まる所なく、我國精神界の將來は全く暗黒なり、世の宗教を談ずるもの、宗教の智識あるに非ず、信

仰の經驗存するに非ず、宗教以外に立ちて宗教を説く、豈是れ眞の宗教ならんや、自信ずる所なくして他をして之に信賴せしめんとす、世の耳を傾けざる抑また理由ありと謂ふべし。

我國に於ける宗教の戦争は、尙その準備をも始めざるなり、大に聖典の講究を開き、その解釋に於て遺憾なき、戦闘準備の一なり、廣く宣教の方法を講じ、一切の社會改善の事業を收めて、宗教機關の完備を期す、戦闘準備の二なり、宗教者の資格を高め、その教育を完成せしむる、是れ戦闘準備の三なり、而してこの戦闘準備は、即その戦争にして、この準備の小に依り、その占領の範圍の廣狹を來たすなり、佛教はその準備の極めて不完全なるにも係らず、曾て根本的に之を改善するの勇なく、依然宗判の舊夢に安んじ、全く當年の惰力にのみ生存せるもの、如く、耶蘇教者に至りては、その準備は比較的に完成し居りしを以て、その示威時代

に於ては、稍成功の趣ありしも、一たび外援を棄て、獨立し、國家思想に同化せんとしたるの結果、信仰全く水平に歸し、教化の天職を去りて、自營の業務に従事するものも多く、今は戦闘員にすら事缺くの有様となりたるもの、如し、而して神道、儒道はかゝる點に於ては全く無能力なれば、我國宗教の振はざる亦知るべきなり、將來精神界の王冠は、果して何れの宗教の有に歸すべきや。

維新以來、我國に於ては政治上、宗教を忌避するの慣習自成りて、之か分離に成功したるの結果、何事をもこの筆法を以て律せんとし、例せば監獄教誨の如き、到底宗教の力に依らざるべからざるものまでも、之を宗教の手より離れしめんとせしことあり、今やその經驗の教ふる所に依り、少しくその非を悟り、宗教の勢力を利用するの適當なるを知り得たり、教育上、倫理訓育の宗教的後援なくして奏功せし例なきは、世界歴史

の教ふる所たるにも係らず、全く之を排斥せんとするあり、倫理と宗教はその理論の上に於て分離し得べきと同じく、實際に於ても亦分離し得べきや否や、こは一種の問題なりと雖、我國に於ては左までの不便なきものゝ如く、假令實際不便の點あるも、再宗教を教育の實際に用るは到底今に於て望むべきに非るなり、是れ、我國宗教の無能力にして、倫理的修養の實力なきに依るものにして亦如何ともすべからざるなり。而して我國宗教の無能力は、實に此點に止らず、宗教の資格を定むるに最樞要なる社會改善の事業に於て、亦全く無能力なり、釋尊開教當時にありし社會改良の精神、今は全く斷へ、阿育王治世の慈善事業亦影を留めず、門下無告の窮民、病に沈み苦を訴ふるも、之を收容すべき病院なく、施療の門戸遂に開けず、職業を授くべき貧民院の設あるなく、孤獨を養ふの慈善院なく、學齡兒童を訓育するの日曜學校なし、通俗に宗教を教

ふる機關なく、青年會の組織連絡亦全きを得ず、勞働問題、日に益々起らんとするも、曾て之が解釋の道を講ぜず、心、眞諦に馳せて、而して眞諦の運用たる俗語を忘れ、世間を離れて、出世間の道を講ずるの弊、又救ふべからざるに至れり、佛心者大慈悲是とは佛説の訓言にして、佛の心を以て心となすは遺弟の本分なり、然して我國十萬の僧侶は、之に對し、常に出世間的の解釋を與ふるのみにして、曾て慈悲の佛心を社會の實際に布宣するを務めず、故に社會の下層には、慈善の涙に生々すべき幾多の衆生あるも一人の之が救護の道を講ずるものあることなし、於諸衆生、視若自己とは大乘教理の眞髓なり、如此美麗なる一視同仁の教理あるにも係らず、曾て之を世間的に解釋せしものなく、佛教は日に盛んに信仰月に廣まりて、而して社會改良の資たるべきの業、一も佛者の手に出でず、佛教は遂に非社會的宗教となり終れるに至れり。



現今佛教者中、慈善事業を説き、社會改良の手始めを試みんと欲するものなきに非ず、而れども、是れ實に基督教者活動の反應に出でしものにして、曾て佛教仁慈の大道より割出し、自然慈愛の涙より出でしものあることなし、要するに、自己聖典の講究、沒歴史的、非學術的にして、教理の解釋に學術を應用するの道を知らず、世の實用に應すべき解釋の方法に暗きに依れり、故に僧侶は、日に世と遠ざかり、而かも世と共に宗教に於ける無智を表白するに至る、自、宗教を研究するの資格を備へず、又人を宗教に導くの地位なし、之れを耶蘇教に視る、その差異果して幾何ぞ、神學講究の機關、各大學に備はり、新舊兩約書の原語及その譯語（ヘブライ語、希臘語、アルメニヤ語、シリヤ語、羅旬語）の研學、日に盛んにして、その解釋、翻譯の斬新なる、誠に燦然として見るべきものあり、各派連合の「聖書改譯會」は、頑陋守舊の羅馬教より破格急進のユニテリアン教會に至

るまで、悉く委員を出して、翻譯の改良に従事し、神意の發揮に餘念なし、而してこの學術的精神は獨り自教の聖典に止まらず、波羅門教、佛教、回教、儒教等、他教の聖書に於ても亦發揚せられ、今や、印度古學の中心が印度に在らずして、却て歐洲に存すると同じく、佛教聖典研究の中心も、亦實に歐洲に樹立せられんとす、南方佛教の教典は龍動に於て發行し、北方大乘佛教の經論は、露國大學に於て出版せらる、我國は幸にも、宋、元、明、清、韓の諸大藏經を有するにも係らず、曾て學術的講究を試むるの念なく、寶を懷いて空しく殉死せんとするに似たり、我國佛教は又實に學術的無能力を表白せるものなりと謂ふべし。

如是我國宗教は、政治的に無能力にして、國家教育に無能力なり、倫理的、社會的に無能力にして、亦學術的に無能力なり、然れども、是れ根本的に無能力なるに非ずして、一たび革新の實行を見れば、能力回復の事、亦望み

なきに非ず、されども宗教社會の腐敗は、その度意外に甚しく、殆どその根底に達したるの趣あれば、容易にその革新の行はるべからざるは勿論、之が防腐の鹽たるも亦實に至難なるを覺ゆるなり、この時に於て殊に旗色鮮明なる一大勢力の存在を望むは、亦自然の勢なり、政治に關せず、教派に係らず、一意宗教の前途を思ひ、國民精神界の將來を支配せんとする一團清徒の必要は、實にこの時に在るなり。

基督教清徒は、過去に於て一大勢力たり、現今に於ても、尙遺風を英米の良家に留め、その潜勢力たるを失はず、佛教清徒同志の精神、若し之を私淑せるものとせば、我精神界の闇黒に對し、茲に一道の光明を認めたるものとして、祝賀せざるを得ざるなり。

佛教清徒同志會の綱領は、その旗色鮮明の點に於て、世の注意を惹くべし、その條目僅に六種に過ぎざるも、少なくとも左の諸項を含有せるも

のと謂ふべし。

- 一、我國新宗教の問題は、佛教を以て解釋し得べしと信じたること、
  - 二、佛教は個人的、社會的改善に於て能力あることを認めたること、
  - 三、佛教の歴史的、根本講究を以て、佛教解釋の方法と認めたること、
  - 四、宗教の比較講究を以て、佛教者の智識發達に必要な方法とせること、
  - 五、迷信は眞佛教を損し、眞佛教は迷信を含有せざることを認定せること、
  - 六、今日の宗教的、制度、組織、禮拜の儀式は、佛教に根本的大關係なきことを認めたること、
  - 七、政治的保護干渉は眞佛教の發揚に害あることを認めたること、
- 是れ佛教の本義は單に寂滅主義にあるものとし、隱遁獨修に適するも

非社會的宗教なりと云ふ世の論法に向ひて、正反對の主義を宣言せるものなり、即、佛教をして世界的、現世的、精神的の方向に進ましめ、社會人格の完全統一をなすの地位に進ましめんとするものなり、その所謂新佛教を以て世界的宗教たらしむるをその最後の目的となすものなるは明かなり、將來の宗教の五資格として、「宗教研究」の著者が望みたる條目、即科學的、道德的、哲學的、世界的、理想的の各條の大部分を満足せしめんと希望せるものゝ如し。

今や、向内向外、俱に宗教を談ずるに足るべき人なきに、佛教清徒諸氏はかゝる廣大なる希望を以て世に顯れ、最完全に近き綱領を世に公にせり、之に對し一二の疑問を發するも、又無用に屬せざるを信ずるなり、疑問の第一として予が同志諸氏に聞かんとするは、その所謂

## 新佛教

とは果して如何なるものを意味するや、是れ即、同志の以て眞の佛教と信ずる所、信仰躰托の根本的主義と認むる所のものなるべしと雖、未その内容の如何を聞かず、世の論者をしてその果して佛教たるや否やをも疑はしむるに至る、同志は佛教所示の「宇宙に遍滿せる唯一實在」を信ずと答へたる外、又その如何を告げざるなり、而れども吾人は幸にして消極的にその舊佛教に對するの宣言を聞くを得たり、即、舊佛教の大部分は習慣的、形式的、迷信的、厭世的、空想的にして、新佛教の主張者は當然之に反對することを公言せり、夫れ舊佛教の精髓を打て一九となし、新佛教の組織をなす、是れ疑ひもなく、世の希望する所、思ふに諸氏亦之を思念せるなるべしと雖、從つて起るべき疑問は、その所謂精髓とは如何なるものを指すか、撰擇者の地位、智識に依りて、その見て以て眞髓となすものゝ異なるべきは無論なり、その標準若し全く哲學的に在らば、是

れ佛教より宗教分子を脱離せるものにして、長へに宗教的光明を占有するを得ざるべく、又その方針全く歴史的に存せば、教理の成立明白を得んも、その範圍時に或は狭小に過ぎ、教理運用の自在を缺くに至ることあり、故に真正學術的講究は、巧みに歴史的、哲學的の調和を圖り、以て新宗教組織の完成を期するに在るなり、歴史的方面に於ては、釋尊なる一大人格を中心とし、この源頭より流出せる高尚の教説、美麗の眞理と稱すべきものを集め、その開教の精神、その社會改善の方針、その救世の本旨を領會し、之に對し適當の解釋を施し、その運用の完全を企圖すべし、而して哲學的方面に於ては、釋尊自説の教義に含有せる哲理の萌芽を探求し、各條に就き遠く遡りてその系統を正し、降りてその發達の全版圖を步測し、惹いて各國特有の發展をも講究せざるべからざるなり、されどその歴史的講究は、必、根本的歴史研究たるを要し、その方法は全

く學理的なるを要するなり、且、哲理の萌芽を捕へきたりて、その變化發展を調査するも、亦是れ一の史的講究にして、歩々その根本教義を忘れず、各時期に於ける發達、各地方に於ける發達、各地方に於ける變化を測定するに於ても、佛説の教理と弟子説の教理とを混交せず、原存のものとなし、新出のものとを甄別し、本有今無、今有本無の諸説、悉皆眼底に徹照するに至らざるべからず、若し夫れ各國特殊の發達の如きは、新加の原素を含蓄し、風土の感化を受けしもの多かるべきを以て、之が講究に於ても、一法を以て律すべからざるものなきに非ず、予は佛教清徒諸氏が是等の講究法を過らず、完全の知識を得て、適當の組織に依り、新佛教の何ものたるを世に公にせんことの遠きに非るを希望して止まざるなり、予が疑問の第二として次に提出せんとするは、その所謂

## 迷信

の範圍なり、日月の崇拜、富貴の祈願が迷信として排斥せられたるは、之をその宣言に於て見るを得たり、されどその迷信範圍は、何れに及ぼすべきやの問題は、意外にその難問題たるを覺ゆるなり、宗教の迷信を含有するは、何れの國と雖、免れ難き所なるも、殊に印度の諸宗教に至りては、迷信を以て充満せりと云ふも過言に非るなり、佛教は比較的迷信を混合せざるものなりしと雖、年月の遷移に伴ひ、大に迷信を加味するに至れり、一たび釋尊の根本教義を以て律するときは、現今見て以て正統の教理となせるもの、亦一の迷信に過ぎざるものあるやも知るべからず、少くとも一の神話的宗教たるを免かれざるものなきに非るべし、彼の根本佛教と雖、解釋の如何に依りては一種の神話説と見得べからざるに非らず、佛のセナール氏、蘭のケルン氏は曾てこの見地を以て佛教を講究し、遂に釋尊を以て實存的人物に非ざるものとなし、恒河の流

域に於ける一新文明を形成せし大聖人の一生は、悉く一種の大陽神話として葬られんとせるに至る、茲に於て獨のオルデンベルヒ氏、蹶起してその妄を辨じ、該博の考證、史蹟の参照に依り、釋尊なる歴史的人物を書き出し、その圍邊に集注せる直弟の性格をも明示し得るに至れり、されど、その神話的要素を全排せんとせし結果、諸種の論點に於て消極的解釋を試みざる可らざりし也、この兩邊の中間を歩み、佛教文學は歴史的要素と神話的要素とを含有せるものとして、兩説の依て出てし兩極の原本を比照參酌し、完全なる佛教史の研究を企圖せしは、萊府大學のウキンデイシユ氏なり、氏は佛教がその開教當時に於て、已に多少の神話的要素を含みたりしものなることを信じて、その講究を始めしなり、是れ實に佛教史の講究としては、最穩當にして、最完全なる方法たるべきも、新宗教組織の上に應用せんとするには、純歴史的講究を以て、正當

なる方法なりとすべし、思ふにその研究愈進むに至らば、諸氏が大膽なる斷案を迷信解釋の上に與へ、迷信の範圍を明示するの日あるを期し得るならん。

予は尙進んで綱領の第二、第五に對し、粗大なる疑問を試みんとせしも、退いて考ふれば、佛教清徒諸氏は、今尙新佛教組織の途上に在るものにして、一意聖典の講究に餘念なきの地に在るものたれば、その實行的面に向つて、疑問を試むるは、今に於てはその早計たるを免れざるなり。予は茲に諸氏が綱領中に於て、宗教の比較講究を主唱せるに對し、一言祝辭を述べてこの篇を終らんとす、抑、比較講究は眞正學術の本領にして、自他の地位を知悉し、その利害を領會せしむるに於て最必要なるものなり、第十九世紀學術の進歩は、一に比較講究に基くものにして學者の最意を注ぐべき所たり、而してその功果、宗教の比較講究に於て、亦實

に宏大なりとなす、故に基督教徒は早く已に之を用ひ、自己の知識進捗の一方法となせり、一たび他の宗教を講究するや、その會て與へたる「宗教」の定義、範圍も、從つて變更せざるを得ざるに至れり、清徒諸氏若しこの精神を以て、進んで宇内の各宗教を討究し、遂にヘーゲルは何故に「佛教を自攝觀念の宗教となせしか、ハルトマンは何故に絶對的空想教とせしか、近世比較宗教の大家たるゾーレ博士は何故に、佛教を倫理的宗教とし、世界的統一宗とし、基督教、回教と並舉せしか、唯物論者ハックスレー氏は、何故に近世唯心論の大家たるパーケレーの哲學よりも、一層深奥の地に達せりとして、佛教哲學の高妙を嘆稱せしや、印度思想の鼓吹者たるドイセン氏は、何故、その哲學の根本思想を印度に取りしや、將シヨッペンハウエルは何故に、左の言を發したるや。

若し、予が哲學の結果を眞理の標準と見ば、予は佛教を以て他の哲學

の最上位に置かざるべからず、予が哲學が世界大多數の人の信仰せる宗教と、かくまで一致せるは、予に取りては、一大満足とせざるを得ず、予が殊に歡喜に耐へざるは、予は予が哲學組織に於ては、毫も佛教の感化を受けたることなく、全く獨立の構成をなし、偶、佛教と一致せしものなるを以てなり。

佛教は何故に如是世の賞賛を博したるか、何故に如此異様の見解を施したるかを知らば、新宗教の組織、眞佛教の成立、亦至難の業に非ざるべきなり、殊に予が諸氏に望む所は、その宗教の討究に於て、その經論の研鑽に於て、勇往獨歩、世論の如何に顧慮せず、學說の可否に心を奪れざるの一事なり、學者の論議は參考として、最妙味を覺ゆるも、宗教者の取つて以て實用に試みんには、最不適當なるもの多きを忘るゝ勿れ、宗教の論議、聖典の論究、一たびその方向を誤らば、亦如何ともすべからざるに

至らん、願くは他の爲に迷はざるゝことなく、自己を知るものは自己なることを信ぜしめよ。

## 六、宗教一轉の時機

(明治三十四年四月  
教晦時報)

マクス、ミュラー博士常に人に教へて曰、社會百般の物、皆改善を待つて發達す、宗教は殊に然り、佛若し今日に再現し玉は、必や自教改善の主張者たるべしと、是れ實に千古の格言にして、宗教家が常に仰ひて以て警語と爲すべきものなり。

今より二千五百年の前に方りて、佛出世の當時を追想するに、印度川の流域に於ける波羅門文明は、遂にその光明を失ひ、恒河の流域に於ける佛教文明の氣運漸く開けんとなす、是れ實に印度に於ける精神的、一大發展の時機なりと謂ふべし。

從來信仰の源泉と仰ぎたる四吠陀カエダの天啓は、去りてその地を三菩提の自證に譲り、波羅門教權の獨占は、轉じて僧伽の教權均霑の主義と化し、四姓差別の社會制度は、遂に種族權平等の大道に進み、祭祀犠牲の神聖は、佛の前には自利暗劣の私法と叱せられ、信仰萬能の大義に依り、宗教は貴族的より平民的に進み、保守的より進取的に趣き、儀式的より遂に精神的一大發展に向ふに至りたり、是れ佛の社會改善の精神が、その光明を當時の社會に發したるものと知るべし。

佛教文明の結果として、恒河を以て中心とせる流域一帯の地方に於ては、上は王公貴族より、下は下賤の卑族に至る迄、その恩化を被らざるものなく、引ひて全印度の各地方に及び、宗教的幸福なる一國民を現出するに至りたり、佛は實に宗教改善の主義を實行して、その光明を社會改善の上に發揚したるものなり。

然るに、佛教が他の國に移るの時に於ては、その國に於ける宗教の程度に相應するの必要あるを以て、時に反動變化の實なきに非ず、故に當時宗教的幼稚なりし東洋の諸國に於ては、佛教は概ね貴族的傾向を示し、儀式的態度を養成し、祭祀犠牲の舊例を再現し、教權獨占の古智を復演せんとするに至れり、我日本に於ても實にこの宗教病的傾向を示したるは事實にして、念佛門の唱導、淨土教の開展は、慥に上示の病的狀態を救はんとて顯れたるものなり、宗教の教理的方面に於ては、數度の改善を経て、稍満足の域に進みたるも、その社會的方面に於ける改善は、未嘗てその功を奏せず、この點に於て宗教の任務を盡せるの宗派は、殆皆無なりと謂ふべし、我が宗教界、我日本の社會に於て、今日今時最必要とする所は、宗教者がその社會的任務を盡し、宗教の社會的發達を促し、その慈善主義を社會の實際問題に應用し、その同愛主義を社會階級の最下



層にまで普及せしめ、慈悲平等の旗色を明かにし、佛心者大慈悲是の主  
義を説き、視衆生若自己の大道を啓示せんことを計るに在り、是れ即社  
會改善主義を實行し、自然の結果として、宗教改善を計るものにして、佛  
が宗教改善主義を實行し、必然の結果として、社會改善を遂行せられた  
ると正反對の方法にして、而かもその所歸一致せるものなり、精神的活  
動の二而不二なる所以蓋此に在りて存すと謂ふべし。

宗教も亦果して改善を待て發達するものとせば、今日に於ける改善は  
唯社會的方面に向つて進捗するに在るのみ、而して社會各層の人民中、  
最多く宗教的訓化を要するものは、最遠く宗教的恩光を離れたるもの  
に在り、知りて而して罪を犯すもの、知らずして而して罪を蒙るもの、止  
むなく罪に陥るもの、罪惡を以てその生命を支ふるもの、是れ皆罪戾に  
腐蝕せられたる人類なり、最遠く宗教訓化を去れるの人なり、是れ所謂

社會の病的人民なり、而して是等の病態よりかの病民を救出するは、實  
に精神的訓化を司る宗教家其人の任務なりとす、彼等をして再び健全  
の常態に復せしめ、無辜の良民たらしむるは、宗教の社會的活動に依ら  
ずんばあるべからず、而して社會的活動なきの宗教は、宗教にして宗教  
に非ず、病態人民に對して、拔苦の實を擧ぐる能はざるの宗教は、死宗教  
のみ、社會的生命なきの宗教のみ。

監獄教誨は實に宗教の死活を判する一大試金石なり、宗教の精神的拔  
苦は、實に罪囚感化の事業に於て發揮せらる、監獄教誨は、社會訓化の事  
業中、最名譽ある、最光榮ある社會的大事業なり、この事業に次いで、肉躰  
的拔苦の宗教的事業は、貧民院、施療院、孤兒院、癩病院、感化院等に於て實  
行せらるべきなり、之を總稱して宗教の社會的事業と云ふ、宗教が國家  
の治化を補ひ、人道の大義を保維し、地に平和を布き、人に好意を與ふる

の本分を盡す所亦實に此に在り、宗教の死活亦一に此に係る、宗教一轉の機亦實に此に萌す。

教誨師諸君の双肩能くこの大任を荷ひ得るや否や。

## 七、社會改善の精神

(明治三十四年十月  
東京毎週新報九六九)

救世軍の別動隊が遊里の真中に立つて、廢娼の演説をした、その時は人その無謀に驚いた、間もなく二六社の運動が起つた、すると松井部長が出張し、自由廢業の承認を與へた、人々皆意外に感じたれど、その行爲が遂に規則となりて發布せられし時は、官廳の意志も明白になり、自由廢業のみでなく、その自由生活の範圍までも廣められた、樓主の狼狽はさもあるべき處だが、よく事理を辨へて見れば、人の意志の自由を束縛し、その束縛を自分の營業の種と心得るは不都合千萬だ、それはともかく

くも、この救世軍、この二六社中、この官廳の規則、その精神を尋ねて見れば、實に喜びに耐えぬ、なぜなればこれが即ち社會改善の精神が、上下、官民の間に、行亘りたる證據であるから、だ、之を十五六年前、我々が禁酒、禁烟を唱へ、廢娼を唱へた時と比較すると、えらい相違だ、その時には識者には耶蘇教かぶれとか云つて、撥斥され、おまけに岐阜、和歌山と續々公娼が許された、世はまだ闇黒だ。

施政者も追々と社會改良の必用を自覺した、殊に社會病的、人種を感化、訓育して、良民に復歸せしむるに、正當の方法を講ずるは、政府の義務なることを自覺した、そこで「警察監獄學校」の設けも出來た、之は大なる社會的、事業である、殊に喜ぶべきは、病的、人民を訓化するには、倫理的、宗教的、施設を眞實に、必用と認め、たことである、故に警監學校には、宗教の代表者を入學せしめた、すると即座に功績が顯はれて、東西兩本願寺の

「監獄教誨師養成所を生ずるに至つてこの方面に於て政府の爲せし事業中の最大美事だ、留岡君の教育事業、原胤昭君の出獄人訓育事業は、無論上下に知れ亘りたる大事業だ。

社會の公德高まらず、社會的の制裁がまた薄弱だ、當局者は風俗の改良に力を與ふることに決した、行政執行法も發布せられた、併し餘り實行は見へないゆすり征伐の方法も講ぜられた、娼妓の年齢も限られた、自由の廢業も許さるゝに至つたのは、社會の狀態を改善するに大なる力のあるもので、上下の精神が社會改良に向ひ居るから出來たのだ、是れは近年萬國監獄會議や、病毒豫防會議や、色々の會議に人を出したお蔭だろう、とにかく喜ぶべき現象である、衆議院自身の内部は随分改良すべき處もあるだろうが、その學童の禁烟を主張したのは、善惡の評はあるが、その精神は最好みすべきものだ、文部大臣が寄席の話に注意した

のも、遞信大臣が切手貯金を設けて、學童貯金と貧民の蓄財に便にせし、同精神で至極結構だ、その外又宴會改良だ、音樂改良だ、結構な事が起つた、結構だからと云つて、かゝる瑣事に満足したら、社會の改良は出來ないが、只喜ぶのは上下一般この意向になつたと云ふ一事である、眞成の社會改良と云ふものは、具眼の經世家と、政府と、教育家と、宗教者とが一致して、初めて成功するのである、宗教者が最大部分を働くべきに意外の無能力であるのは悲しいことだ、如此したのは、大半政府の責任である。

政府も今後は、宗教を可成優遇して、今までのやうにこれを邪魔者の様にせぬことが肝要である、これを冷遇して敵とすると、これを優遇して用ふべき能力ある宗教を用ゐべき場處に利用するは、策の最も得たるものである、當今政府の義務として行ふべきは、能力ある宗派に社會改

良の精神を吹込むにあると思ふ、今では宗教者の眼中には學者もなければ、富豪もない、貴族も、豪傑も何とも思はぬ、唯信切にして敵意なき政府の忠告のみは、眞面目に聽く、又喜んで之を實行する、この方面の能力を發達せしむるはその責唯政府にある、政府の外爲し得るものはない、政府は意志薄弱なる日本佛教には實に神格的權力がある。

## 陸海軍的孤兒院

孤兒を養育するに最もむづかしいのは、常人の如くに感じ、常人の如くに生活せしむるに在る、孤兒は凡てその思想のひがむもので、之を正當に養育し、その資性の發達を充分ならしむるは、その愛親に異らざる師父あるを要す、之を得ることがむづかしい、偶之を得るも一朝その人を失へば遂に如何ともする能はざるに至ることが往々ある、是等總べての方面で、最も適し最も好結果ありと思はるゝは、孤兒院を海陸軍的組

織にするに在る、これは小兒の時より悉く軍隊組織にして養育する、即ち女子は多く看護婦に仕立て、男子は陸海兵、樂隊、其他の各部員として教育し、生ながらにして軍隊生活に馴れしむる仕組だ、その間無論各種の職業を教へ、自活の道を教ゆることとは常の如くする、かくて二十一歳となると、先づ人々の義務として、志願兵とならしめ、女子は、赤十字その他病院の看護婦とならしむる仕組だ、しかし男女とも獨立の生活の出来るまでは何時までも見届けることゝせねばならぬ、この組織の利する所は、一は個々の孤兒をして、一齊の教訓を受けしめ、そのひがみ根性を生ぜしめざるに有効なると同時に、又時々日曜等に京内を行軍し、樂隊、看護婦をも完備して、晴れの場所に出でしめ、人々の慈善心を喚起するに尤利益である、その殊勝に、完全に軍樂を奏し、軍律に服し、一致の舉動あるを見れば、多くの慈善の涙を誘生する、方便となるものである、殊

にその海軍にしたものは、我國海軍思想の缺乏を補ふの道ともなれば、初めは庭内に大船を造り其中に眠食せしめ、漸次海に出て實習せしむる、これに對する反對には我國軍事思想の盛んなるに、何ぞかくしてまて養成するの必要あるやと云ふ人もあらう、されど孤兒院を陸海軍組織となすは、慥に一大良法たるを失はない。

#### 普通國士の資格

茲に國士と名くるは、一國普通の紳士を指すものである、この日本の紳士として他國に耻ぢざる人士の資格として、必ず所有すべき智識は何であるといふに、或は中學程度の智識であるとか、随分世の議論もあるであらふ、しかし予が今日日本國士の品位として他に耻ぢざる智識を所有することを必要と認むるは此の如きものではない、凡そ大學專攻の學科を終へしものも、中學程度にて終りしものも、各種の専門の學力を

有せるものも、凡そ日本國の紳士として一般の交際を爲し得るものは、必ず左の三種の智識を有すべきを主張せんとするものである、それは

#### 第一 日本歴史の智識

#### 第二 日本文學史の智識

#### 第三 日本地理の智識

て餘り掛け離れたる智識ではない、今後の青年はその大概は所有せる等であるが、今日の紳士に對して大なる注意を請はなければならぬ、日本の華族の子弟なり、富豪の青年、その他凡べて通常人の風上に立ち、品位の標準ともなるべき紳士に就て、一言歴史の話を試みれば、直にその空腦なることを發見する、殊に文學史に至りては誰ても分らない、無論文學史と云へばとて、深奥專攻の智識を望む譯でない、日本には如何なる文學が存して、如何なる價值のものである、戯曲は如何なる資格のもの

ので、文學は何れの時に頽廢したかと云ふが如き大畧の智識にても宜ろし、畢竟一度或人の説を聞けば、明白に得らるべき程度の智識が多く、の紳士には皆無である、之れに附屬して日本美術の價值などは、少しは心得て置かねばならぬ、世界の美術史上、現下、唯二大動力を認とめ得る、その一は希臘美術であつて、紀元前の太古に起因し、印度を風化し、波斯を隨かへ、歐洲全土を席捲して、新文明の要素となつた、一は日本美術である、日本美術には無論印度式も、希臘式も、支那風も、朝鮮風もある、しかし今日の日本美術は純然たる日本風であつて、以上の各式、各風の長所を採り、應用門に入りて之れを日本化し終つたものである、今日歐米の應用美術は又更に日本化せんとする勢がある、故に希臘美術は主として純正美術として世に迎かへられ、日本美術は却つて應用美術にその美を發揮せんとして居る、總體、古今の美術のこと、文學のこと、美文のこ

とに就ても世の紳士は少しく學者の説をも聞きて、一と通りは梗概を心得居なくては日本紳士として、即ち國士の資格あるものとして、歐洲人の前に紹介するに足らないものである、この點に於ては實に感慨に耐へない有様である、又これよりも更に甚しきものがある、日本紳士として日本國の地理に暗きことである、黒潮とは如何なる性質のものか、何故に黒潮はかく暖波を我々に送るか、また日本各地の緯度に關する智識より、氣象風位の大略、各地風俗、言語、宗教の大要は心得居るべきは勿論なるも、聞さも聞し、甚しきは東西南北の區別もなき人がある、これに附屬して日本人種に關する要項、アイヌの性質、琉球臺灣の民種、内地各地方の特質等も大略心得居らざるべからず、堂々たる紳士が實に中學程度にも劣る有様がないでもない、唯少々の注意能く之を矯正し得るものなれば、國士の資格を有せんと欲せば、正しく自身の修養を要す

るのである。

吾人一度歐洲人に接すれば諸種の問題口を衝て起る、日本宗教のことを問はるれば神、佛、耶の三教の大略は答へ得るも、一步を進まば知らずと答へ、美術を問はるゝも、知らずと答へ、歴史を問はるゝも、年代を聞かざるゝ時は、一言の答も出来ず、地理に於ては却てその淺智を發見せられ、殊に文學のことに及ばゞ、われ文學者に非らずと答ふるの外、言の返すべきなきに至る、憐むべきの極と云はねばならぬ、現今の紳士は殊に此點に注意し、國士の三智識の必要を自覺せねば、日本紳士は到底歐米人と同等の品位は得られない、殊に陸海軍の士官諸氏に望むは、今少し其胸宇を開きて智識の範圍を擴充するの一事である、戰勝國の士官として世は氏等を歓迎せるに、無風流一邊の紳士にして、文學の趣味を解せず、美術の智識なく、歴史に關き時は、その軍隊に於ける優勝は、却て交際

場裏の劣敗に歸せんことを恐るゝのである。

#### 音樂の普及

日本にては西洋風の音樂が發達しない、世に遍く行はれない、これには色々の原因もあるが、普及の方法を講ぜないのが主因である、第一音樂の効用は皆無分らぬ、從てこれを普及するの道を講ずるとをしない。音樂學校は花の上野に隱居して機能を世に示さぬ計ではない、その音樂會も滅多に公開せぬ、儀式と義務とで傍聽人はあるが、傍聽者の範圍は今も昔も變更せぬ、當事者も音樂學生も、音樂に堪能なるものも、皆その自己の主義責任即ち音樂普及に對する任務を自覺して居ない、音樂感化の廣まるのは、民生の一大幸福で、社會改良の一端と云ふとを知らぬ、花の上野は帝都人士の足の向ふ所、即ち音樂普及には最も好地位を占めたるものである、然るに之を利用し、之を應用することを知らぬ、又

音楽が必ず歌謠と共に發達すると云ふことも充分に了得が出来て居らぬと見へる、此點に於ては少々の施設、能く宏大の進歩を促すといふことを知らねばならぬ、全國小學校に音楽を用ひ、耶穌教會に讚美歌あり、その上に音楽學校の存するあれば、日本の音楽は之に依りて發達すると思つたが、これは一の妄想で、中々そうは行かない、明治音樂會の如き、漸く日本固有の音楽の勢力を借りて人氣を引くを得るのみ、實に憐れなる次第である、市内樂隊の不完成も實に驚く、音楽の方面に於ても亦一大改革を要する、これには色々考案もあつたが、今に行はれぬ、差當り音楽學校長の如き人を得たりと信ずれば、充分に相談して音楽普及を計らねばならないこと、思ふ、人民中に音楽の必用なるは英國トイ  
ンビーホール大學分殖館等に徴しても、救世軍の經營に徴しても分かる、殊に國民の愛國思想、自負心、和合性等音楽に依らねば發達の柁が取れない、養成の道を得ない、この外御婚儀を祝して献上すると云ふ美術館のと、今回文部省で建てる美術展覽會のこと、國語調査會に就ても、小言を云ひたいが、これは又他日に譲ることとしやう。

## 八、日本の家族本位と

### 歐洲の個人本位

(明治三十九年五月一日  
新公論第二十二年第五號)

日本が世界の外交と歐米の人心に與へたる變化

世界に類無き兵力と民力との合一を得て、列國環視の間に未曾有の名聲を博した日露戦役は列國の外交と世界の人心に異常の變化を與へた、佛蘭西が獨逸と英吉利とを牽制する目的で露西亞と同盟して居つたのが、今回の戦争で權力の中心が破れて、今では何國が歐亞の盟主となるか分らぬ、佛英兩國の親和となり、獨露兩國の近接となり、羨望する



もの、反目するもの、虚喝するもの、畏縮するもの、各その志望を違ふせんとして世は再び暗闘時代に返つた。今は何の國の兵力、民力を調べて見てもその統一の働きに於ては日本の尤恐るべきを覺つた。勿論日英同盟の力には抗することは出来まい、少くとも今後百年何國でも獨力て日本にかゝて來やうと云ふ國は先づ無からう。東洋流の言語で云つたら日本は先づ萬代不易の國に成つたとも國家を泰山の安きに置いたとも謂ふ可きである。

英國に於いても戦争の初め日本の公債が一千圓のものが七百圓位より昇つたことが無かつたのが、今は常に其以上に上つて居る。日英同盟も戦争の前は英國の或る一部はその効力を疑つて居つたに拘はらず、今は日英同盟で無くては到底世界の中心に横行濶歩をする事は出来ぬと云ふ有様で、殊更に同盟を擴張して行くやうになつた。又新聞雜誌

界でも以前は決して日本の味方斗りては無く、随分露西亞の味方のものあつたが、戦争の進むと同時に皆一變して日本最負になつたのみならず一般日本の風を學ぶやうなことに成つて、先づ軍人の教育を學ばなければ成らぬと云ふので、毎年五人の士官を遣はして日本の軍隊に就て實地を研究する。又一般の國民教育に就ても調べなければ成らぬと云ふので、教育家を招聘して講義を開くことになり、澤柳普通學務局長が行つた、赤十字事業でも英國皇室の思召で、マツコー、ル嬢が視察に來て我國の組織を學ばうと云ふ有様である。

ヘーグの平和會議にも戦争前に日本は三等國であつたのが一躍一等國となつた。基督教國が野蠻教の日本を征服す可しと妄信して居つたものがガラリと反對の結果を生じた。彼等の思想は根底より變化されたのである。

## 日本人の勝つた原因が解らぬ

強大の露國に向つて海に陸に敗戦の跡を一回残さず、戦勝の光榮を擔つた日本人は、實に不思議な人種である。日本人は何故勝つたか、どうしても解らぬ、これ今日歐米人普通の、大疑問で、亞米利加では日本人は少食な人種であるから、この強いのも少食から來たかも知れぬと云て、一部の軍隊に少食主義を試験して見たやうな滑稽もある、ロンドンではソザ／＼在留の日本人二百有餘を一人一人訪問して、日本人を觀察した者がある、彼等の云ふにどうも日本人は不思議な人種だ、一人々々調べて見ると格別えらい人も見あたらない、個人と個人を比べて見ると日本人は歐米人に比して特に優等な人種とはどうも思へない、然るに日本人全體が一所に成つた時には歐米人には出來ない事をやると、これが西洋人には不思議でたまらない、殊に此度の戦争の結果は何う云

ふもので斯うなつたであらうかと云ふことで種々に研究の歩を進めて居る、我々は自身のことでも何うして斯う成つたか知らずに済ますことが多いが、彼等は中々爾うて無い、何か一つの現象が起るとこの原因と結果は十分に之を調べずには置かないのである。

戦争に就ての彼等の研究題目となる疑問は

君國の爲めに身を致すに就て實に美はしき全軍一致の精神と軍紀の嚴肅は何の源因から來たか。

從來の戦争に類無き、特に南阿の戦争などに比べて軍隊衛生の事業が驚く可き好成绩を挙げたのは何故であるか。

死を見ること歸へるが如く歐米人の目よりは寧ろ狂と見ゆる迄に進んで犠牲となる強烈なる愛國心の行動は何に依て養はれたか。偵察任務の殆んど各國に類無き程精確なりし原因は何か。

秘密の嚴守即ち軍略の漏洩を防ぐことかく完全なりし所以は何か。最も各國を驚かしたる後方勤務即ち兵糧彈藥の輸送、傷病兵の送還の敏活と完備が特に勝れたる原因は何てあるか。すべて一人一人では弱き日本人が澤山集つて共同的にやれば、歐米人よりも強き理由は何か。

此他日本人は西洋の學術を學んで器械を輸入する、智識を世界に求め彼れを師とすると同時に多くの點に於て日本人は西洋人のやつたよりも一步上に進んで居る、彈藥の下瀬、火藥、銃の村田銃、砲の有坂式、無線電話の木村式、是等も皆彼等の驚ひた所である。

赤十字社の事業ももとは西洋から始まつたものであるが、今では日本の組織が遙に完全して居る、戰時に於ける國民一般の事業の上に於ても、國民の後援、遺族の保護、出征軍人の慰藉、敵捕虜の取扱ひ、俘虜情報機

關の整備、又は公債應募等の事柄に至る迄悉く自分の利益を第二にして國家の爲めに兵力と民力とが一致した事など世界の人から見ても、以て理想の軍隊、理想の國民と思はれたのである、これは何うして斯う云ふ、工合に進んだのであらうか、この結果を見た上は、その原因を探らなくてはならぬ。

是れは四十年の間に行はれた陸海軍の教育と又一般の國民教育と此二つが原因には違ひ無い、併しこれは近い處の原因であつて、更に淵源するところの大なる理由が無ければならぬ、これが歐米人の尤知らんと欲するところで、我國民は素より知らねばならぬ今日の重要な研究問題である。

### 家族本位と個人本位

日本人を一人／＼調べて見ると立派で無いのに、集つて一所に成ると

非常の結果を顯はすと云のは大なる原因がある、それは個人主義と家族主義との別に依て起る者で即ち個人を本位とすると、家族を本位とするとの相違から起る、個人主義とは何う云ふのであるかと云ふと、自分一己を本位として行動する、自分の利益を先とし自分の思ふ所を爲し、他を顧みない、他を顧みるのはつまり自己の爲にすると云ふのが即ち個人主義で、親は子を育てるのが義務であるから子は親に禮をせなければならぬ義務は無い、即ち自分の産んだ者を自分が育てるのは當然である、其代り成年に成つたら子は親を養はむても自分自身を養はんければ成らぬ、夫れ故丁年に成ると甚しい處では親の家に居るのにも下宿料を拂つて居る、爾う云ふ風であるから兄は百萬の金持ても弟は乞食をして居つても救助はしない、彼は自分で怠つて乞食をして居るのであるから助ける理由は無いと云ふ、つまり自分の技倆と學問

とて得た結果は人に與へることはしない、實に利己主義の弊害は恐ろしいものである、親が若し金があつたら死ぬ時分けてやる、夫れ故金があればその金が欲しいから折々來るがそうでなければモウ家を持つと自然に足が遠くなる、つまり西洋は金が命で、自利が中心である、又子の方でも親のすねをかぢつてやつて行く考はない、夫れて自分が食べる丈けの収入が取れるやうに成らなければ決して婚禮もせぬ、夫れ故或非常の金満家に向つて「貴君の御子息は婚禮の約束があるさうですが何時頃に結婚なさいます」と問ふと「否まだ中々婚禮はしないでしよう月給が二人暮しには十分でありますまいから」と答へる、而う云ふ工合に個人を主位として個々別々にやつて居る、此の主義からして英國人でも同情を以て日英同盟に賛成し乍ら露國に船を賣り、食料を送る様な行動もやる、軍隊に統一の六ヶ敷も、軍機の漏洩するの、も皆此個人主

義の餘弊から來るのである、所が日本の家族主義では家族に重きをおいて一族が相扶けてやつて行く、個人を軽くして、家族を重くする、親は子に、子は親に、弟は兄に、兄は弟にと相救ひ相助けて、家門の名譽と繁榮を希ふ、どちらも短所もあれば長所もある、此の家族が澤山集つて村に成つて村中相扶けてやつて行く、その弊としては依頼心の生ずることや、脛嚙り主義の流行を來たすのではあるが、その利の點から見れば國の爲に特に日本の爲めに我國の今日あるを致した大原因となつて居る國といふも家と云ふも同じ事、二千年前に神武天皇の大家族が他の群小の家族を率ひて浦安國の基を開き玉ひしも家族主義であるから多くの臣家が悉く御門の爲御家の爲に働く、そして百二十一世の間我々が今日陛下の臣民で有ると同じく我々の祖先は皇宗譜代の臣であつた、中々三代相恩所でない千代相恩と云つても宜いのである、即ち他國

然違て居る、基督教でも始てザビエーが日本へ來てその教を説いた時に澤山の人が聽きに來た、所が自分の阿母さんが基督を信じて居なかつたので地獄へ落ちて永久の罰を受けて居るに違ひないと聞いてはそんなら私は基督教には成らぬ、親が信じて居なかつた爲に救はれて居ぬならば私も信じないと云つて改宗しない、夫て彼等も實に感心して日本の人は實に高尚な罪のない人物である、斯う云ふ人は實に我心を得たる人だと賞めて居る、爾う云ふ様に、佛教でも儒教でも悉く、家族主義の爲に支配されてしまつた、佛教が今日のやうに成るのには、何れ丈け自分の説を曲げたかも知らぬのである、若しもそれに反して居つたら、逆も日本に擴める事は出来なかつた。

## 家族主義と個人主義の調和

茲に於て結局我國の將來に於てはこれを如何にすべきかとの問題に

義の餘弊から來るのである所が日本の家族主義では家族に重きをおいて一族か相扶けてやつて行く個人を軽くして家族を重くする親は子に子は親に弟は兄に兄は弟にと相救ひ相助けて家門の名譽と繁榮を希ふ、どちらも短所もあれば長所もある、此の家族が澤山集つて村に成つて村中相扶けてやつて行く、その弊としては依頼心の生ずることや、歴噓り主義の流行を來たすのではあるが、その利の點から見れば國の爲に特に日本の爲めに我國の今日あるを致した大原因となつて居る國といふも家と云ふも同じ事、二千年前に神武天皇の大家族が他の群小の家族を率ひて浦安國の基を開き玉ひしも家族主義であるから多くの臣家が悉く御門の爲、御家の爲に働く、そして百二十一世の間我々が今日陛下の臣民で有ると同じ我々の祖先は皇宗譜代の臣であつた、中々三代相恩所でない千代相恩と云つても宜いのである、即ち他國

欠

MISSING

然違て居る、基督教でも始てザビエーが日本へ來てその教を説いた時に澤山の人が聴きに來た所が自分の阿母さんが基督を信じて居なかつたので地獄へ落ちて永久の罰を受けて居るに違ひないと聞いてはそんなら私は基督教には成らぬ、親が信じて居なかつた爲に救はれて居ぬならば私も信じないと云つて改宗しない、夫て彼等も實に感心して日本の人は實に高尚な罪のない人物である、斯う云ふ人は實に我心を得たる人だと賞めて居る、爾う云ふ様に佛教でも儒教でも悉く家族主義の爲に支配されてしまつた、佛教が今日のやうに成るのには何れ丈け自分の説を曲げたかも分らぬのである、若しもそれに反して居つたら、逆も日本に擴める事は出来なかつた。

家族主義と個人主義の調和

茲に於て結局我國の將來に於てはこれを如何にすべきかとの問題に



逢着する。ラフカディオ・ハーンも日本の特色たる家族主義が今後歐米の文明に接觸した以後は大問題であるとして書いて居る。或點に於ては所謂西洋流個人主義を學ばねば競争が出来ぬ、發達が出来ぬ、今日歐米の文明は全く個人主義の賜物である。さりとてこの家族主義を打破しては日本の國家は實に危険である。今日の青年には已に滔々として個人主義の傾がある。先づ自己を中心として然る後家族を考へ、國家を考ふるの人間が殖へかゝつて居る。自己の小意志を抛つて君國の大意志の爲めに犠牲となるの美風は今の青年に消んとして居る。今回の如き戦争が若し五十年百年後に有りとなれば、今日の如き好結果は或は六ヶ敷からずやとの懸念がある。

經世家の大に考慮すべき大問題ではないか。歐米に於ても、近來特に日本の戦勝後、此點に氣付いて個人主義の弊害を説くものが多くなつた。

我國の軍人勅語も教育勅語も西洋人は今迄儒教の寫したとか古代の遺習だとか悪口を云つて居つた所が、今日は日本の勅語は新約全書の福音を讀むやうな心持がすると賞讃して居る。

其他幾多の弊害有る労働問題、社會問題は、歐米にては皆個人主義の餘弊として起つて居る。一のストライキも個人主義を以てすると之を防ぐに中々の困難を感じるが、喩へば我國の印刷局の如く一人を雇入ると同時に家族全體を雇入れ、主人病氣の時は妻子代て行くと云ふが如き制度は、家族主義を労働問題に移したものである。隨てストライキの源因を防ぐに大なる功能がある。家族一同相扶け相救ふて一の仕事に従事する時にストライキなどの起ることは實に少い。蘇格蘭土にてはクランの主義がまだ残つて居る爲め一種家族的の風が有て労働問題の困難が比較的少いと云て居る。此頃英のウヰンチエスターには家

族主義の自治村を模範的に又は試験的にやつて居るものも出来た。我國今後の政治なり教育なり總て此點を考へてやらねばならぬ個人主義も無くしては個人性格の圓滿なる進歩が出来ぬ自分の腕を磨き大競争に打て出ることは是非歐米人の個人主義に學ばねばならぬ唯兩方の主義に於ける弊を避けて其利を取り調和することが大切である。自分の理想又は學說としては極端なる個人主義を唱ふるに素より差支へはないが少くとも今日日本の國體を維持して世界と競争して行くには是非二千年來の家族主義を土臺としこれに西洋個人主義の長所を加へて行かねばならぬ我輩はかくして更に完全なる新日本のナシヨナリチーを形作りたいと思ふ。

要するに我國の工藝教育に於ては個人主義を取り精神教育に於ては家族主義を取るのが正當である。家族主義とは單に家族同住主義では

ない家族主義に基いた國家主義のことである

## 九、家族主義と個人主義

(明治三十九年十月一日  
新公論第二拾一年第十號)

左は本年第五號に掲載せし高楠氏の日本の家族本位と歐米の個人本位と題し我國戰勝の原因を家族主義に在りとしたるに對し板垣伯の反對ありしを以て更に高楠氏が是に答へたるものなり。

板垣伯は維新の功臣で、而も余の尊敬する元老の一人である。然るに斯る名家が余の如き弱輩の議論に對して一顧の値ひありとせられたのは謹んで謝する次第である。若し杜撰なる主張のため世間を惑すといふことになつてはと、この責任の歸することを考えて、更に自分の説を擴張解説して、立論の根據を明白にするの必要があろうと思ふ。依て茲に板垣伯に對して尊敬を表するが爲に、本誌にその要領を載せること

とした。

### 家族主義と個人主義との利弊

全體自分の述べた説の要領は、粗々左の通りであつた。

第一 軍人勅語を基とする軍人教育の結果として、兵士が一心同體の活動をなし得たること。

第二 教育勅語を基としたる國民教育に依て、國民一般に一心同體の動作をなし得たること。

この敵前に在て、君國の爲に身を致す戦争力と、一旦緩急あれば義勇公に奉ずる後援の力と、兩々相一致して、言を換へて云へば、兵力、民力が一致して、同一の目的に向つて働いた結果は、遂に軍國に於ける標準の軍隊模範の國民として、世界の尊敬を享くるに至つたので、歐洲人の日本に對する思想も全く變化して、その取扱の點に於ても、遽かに一等國と

して最強國の班に置かるゝ様になつたのである。斯の如く僅か四十年間の進歩を以て、一足飛びに最強國の一に加はることの出来た人種は、大いに研究すべき民族であるといふ考えからして、日本研究といふことは、歐米人が各々自己の見地に因て、指を染めんとする處となつた。さて戦捷の原因に就いても、宗教であるとか、教育であるとか、大和魂又は武士道、或は國民の自覺心であるとか、野蠻の勇氣に文明の利器を得たから、斯の如き偉大な結果を致したのであるとか、種々に説明を立てるけれど、勿論是等の如き各々その原因であるには相違ないが、此の總ての原因の裏面に横はつて、總ての思想、總ての組織を支配する所の本源は、實に家族主義である。所が此の家族主義には弊害も無論多いが、日本人はその長所と強點とを維持してゐるが爲に、總ての點に於て優勢を示すことが出来たのに、露西亞は個人主義の弱點と弊害とを受け

た爲に、戦争で常に敗をとるに至つた、斯様に一利一害は免れにくいもので、家族主義に弊害があると同時に、個人主義にも亦弊害と利益とが併有されてゐるから、此の二主義を間然なく調和して行く必要があると思ふ。

工藝技術の進歩の爲には、世襲の家族主義は、不適當であると同時に、國民の精神的方面には、個人主義では、纏りのつかない結果を來すのである。個人主義の極端には、恐るべき虚無主義、罷工、示威等の悪結果があつて、家族主義には、食ひ潰しや共倒れの悪結果がある。乃て將來の心得として、は、工藝教育には、個人主義を加味し、精神教育には、家族主義を維持して、努めてその調和を計らねばならぬ。其處に至つて初めて日本民族の名聲を我國二千年の歴史の光と共に、萬代不易の地位に置くことが出来るであらうと思ふ。

板垣伯も勿論極端なる個人主義の主張者ではあるまいから、ツマリ家族主義の弊害を救ふ爲めに、個人主義の長所を採用すると云ふに過ぎないを考へたろうと信じてゐる。歸する處、自分の考へる處では、個人主義は、説法せずとも、自然にその傾向があるが、日にますます忘れんとしつゝある家族主義の美點を維持せんとする爲に、この議を提出した譯である。

#### 家族主義は果して専制なるか

板垣伯は娘を賣つて酒の飲み代となし、家内を苦めて遊興に耽る如きの弊害を擧げて、日本の家族制度は専制主義である、この専制の遺物たる家族主義に何等の美點があるかと、排斥せられたかゝる弊害こそ社會改良の力を以て、識者が改良すれば宜いので、これがあるが爲めに、家族主義を全然排斥するといふのは、チト盲斷に過ぎるであらうと考へら

れる、日本の家族制度は、一人の家長、所謂家督ありて常に家人の利害を一身に引受け、家名相續と資産の増殖を計り、父祖の訓言を守り、その祭式を續けて怠らず、祖先と家族の名譽を傷つけざる様、又家内の小議會に於てはその議長となつて之が經營をなし、家人の教育の爲には、自ら家族學校の長となつて、その面倒を見、常にその親和を計り、罪惡を出さざる爲には、自ら家内の警察の長となつて、之が監督をなし、以てその家督の任務を全うするならば、理想的の家庭も之が爲に作られ、郷黨の平和もこれが爲に維持せられるのである。若し斯の如くに實行せられたらば、壓制を敢てする處の餘地は嘗て存しないのであらうと思ふ。

要するに專制の封建時代に於ては、その家族主義も專制に失したてあろうけれども、立憲政下にある家族主義はこれに相應して、この理想的の家族主義を作ることは、決して難事ではあるまい、家族主義の長所は

欠

MISSING

を模範として、更にその遺志を繼承する志を起し、死者に代つて功業を全うせんとを計るのが通常である。  
之が個人主義の社會で見ると、その個人が已に死んだ後に勳章を贈るのは實に見戲に類するもので、従て斯様な習慣は歐洲には存してゐない、唯其遺族の扶持を要する者があれば、社會は之に對して相當の手當をなすに過ぎないのである。

#### 祖先教と家族主義

板垣伯は我國の皇室を尊崇する美風は、一種の祖先教にして、家族主義に非ずと斷定せられた然るに、我國一般の祖先教は全く家族主義より發展したもので、他の人種の有する祖先教とは全くその趣を異にし、死者の靈を畏れて之を崇拜するものでなく、自己の父祖を重んじて之を敬愛するの孝心より發達したものである。今日まで膝下に孝養給仕せ

る父母が、一朝死亡したりとするも、猶その遺愛を慕ふ衷情より、家内にその靈位を設け、之に仕ふること恰も生者に仕ふるが如くする所の風俗習慣から漸く進んで、父祖代々の靈を祀る様になり、遂に祖先崇拜の形を成すに至つたのである。乃て、上下大小の別こそあれ、皇室に於ける賢所の起原も、われわれの父祖に對する敬禮も、同一の家族主義に起因したものである。

われわれが戴いて最も自慢する所の萬世一系の皇統も、詮ずる處、各種家族の家名相續と同一の主義に基けるもので、この萬國無比の國體を生じ、空前の發展をしたのも、ツマリ家族主義の賜である。多くの家族を集めて、組合をなし、村を形造り、終に國をなすに至るものであるから、國と家とは單に規模の大小に止まるのみで、われわれが名づけて國家といふものこの邊からであらう。皇祖皇宗はこの群小の家族を統率し、之

を統一し愛護し給ひし結果により、一切の家族が仰いで以て御門と稱し皇室として、無限の服従を表する所以である。われわれの祖先の家族は、則ち皇室の下臣として天恩を忝ふしたものであるからして、皇室と衆民との關係は、殆ど同一家族の如く、終に離る可らざる結果を生じた。今日君國の爲に身を致すも、代々相恩の徳に報ゆるに外ならぬ。斯様な恩惠を涵養するには、家族主義の國民で無くては得難いものである。

#### 國民の自覺心

自覺心とは、自己の地位を知り、その地位に相應する本分を盡す心である。板垣伯は水戸藩は夙に天下の大勢に明にして、十分の自覺心を有したるを以て、強い勢であつたが、中途で内輪喧嘩の爲に、自覺心を失て遂に又衰運に傾いたと云はれた。此點は最も注意を要すべき處であつて、一般で云へば、内輪喧嘩、一個人で云はば、利己主義の爲に、得て自覺心を



紛失するに至るものである。乃て單に個人主義の自覺心なるものに依頼するのは、社會的に生存する人間には最も危険である。故に第一に之をその家族と社會との兩關門に於て喰ひ止むる時は、その自己的利己主義を制して、好く自覺心を維持せしむることが出来る。

今若し舉國一致の自覺心を維持せんと欲するならば、幾多の家族々々に於て、これを纏める時は、その一致を強くし、且つ之が退廢を防ぐといふことに、大いなる便利を得る。之が即ち敵前に在つては、戰鬪力となり、軍後にあつては、後援となり、活動となり、容易く目的を達することが出来るのである。南亞戰爭時代の英國も、日露戰爭の時の日本も、一般國民は同く自覺心は有つた。内地に於ては幾千百の涙に沈む人があるけれども、而もその個人の悲を制して、國家の爲に名譽の戰死を遂げたのを喜ぶのは、獨り家族主義の日本に於て得る處であつて、英國の南亞戰爭

中、各人が子弟を失ふたのを陰に陽に冤訴する者が至て多かつたのは、即ち個人主義の弊が顯はれて、國民的自覺心が多少、痲痺して居つたからである。

伯は同一地方に於て、同じ状態にあつた各藩中に、強弱の差が有つたのは何故で有るか、と云ふ説明を望まれたけれ、共同じ地方同じ状態といふ事は決して強弱の原因ではない。いくら自覺心があつても、強弱の差は自らあつて、又時にその自覺心を喪失し、若しくは更に之を發揮する者のあるのは、自然の勢である。要するに國民の自覺心は、戰捷の源因たるは争ふ可らざる事實で、自分が兵力、民力の一致、同心一體の活動と云ふたのは、伯の所請國民の自覺心であつて、現れて軍隊の精神となり、決死の奮戰となり、軍紀嚴肅となり、秘密の嚴守となり、敵情視察の精神となり、後方勤務の完成となり、内國に於て國民の後援となり、公債の應募

となり、軍隊傷病兵の慰問となり、敵捕虜の愛護となり、赤十字の功業となり、俘虜情報の好成绩となり、以て世界萬國の尊敬を買ひうるに至つたのである。或は今日迄、日本を野蠻國と信じたる心よりして、驚きの餘り、日本を尊敬せる様に考ふる人もあろうが、それは甚しき誤謬で、英國の如きは現に多數の士官を我國の各師團に従屬せしめて、軍人教育の實際を學び、人を特派して、赤十字事業を調査し、以て自國の赤十字事業の組織を改め、我參謀部の組織を參酌し、又我國國民の教育制度を學習せんとし、且つその同盟を擴張して、攻守同盟の結果を得たるが如き事實を調べば、一朝も世辭的の贊稱でないことは、火を賭るよりも明かである。と云はねばならぬ。

## 十、克己心と理想

(明治四十二年十月  
實業の日本臨時號)

人は事實を抽象して理想を作り、その理想の光に導かれて生活して居るものである。その理想の高いと低いとに依つて人格の高いと低いとが定まるのである。物質的生活に目を奪はれて、精神的生活の何ものたるを知らないのは理想の最低いものである。我々の目的を定める上では理想は成るべく高くして置いて我々の日常の生活や日常の行事は果して作つた理想に適應したものであるか、理想に對照して見たら耻ぢ入るようなものではないかと云ふことを常に自省するのが必用である。若し理想がないなら克己心などは必用はない、思ふまゝに己れの慾を擴充して五感の小欲を満たし、現前の小意志を追隨して暮らせばそれで足るのである。自己が大慾があり大意志があり大理想があるから目前の小自己を捨て、小自己に打勝つて遂に大自己を作り上げんとするのである。人間は理想に對照して見ないと喜んで自己を制すると

云ふことは出来ないものである。

## 人間の三性

我々の心の中では三種の性が常に争闘して居るのである。三性と云ふは我々が常に活動、活動を欲する性と安逸を欲する性と正義を欲する性と三種である。言ひ換へて見れば動性と暗性と善性とである。我々は何事か爲んとして恒に活動して居る、而るに暗性が出て昏沈の情を起し安眠の欲を生ずる、併し動性が蕃殖しても暗性が旺盛になつても甚く罪惡的傾向を生ぜない内はよいが向下的罪惡に向んとすると善惡判断の善性が顯はれて所謂良心の制裁が得られる、而るに暗性が盛んになつて善性を暗らまし、動性が盛んになつて善性を攪亂すると善性が遂に鈍ぶる時がある、之が最恐るべき結果を生ずるのである、こうなる

と人間は黑暗蠢動の一土塊に過ぎないことになる、そこで人は暗性の發動のまだ弱い内に之を滅して安逸、墮落に陥らないようにし、動性の發展がまだ惡傾向を生ぜない内に之を制御して盲動、輕舉に至らないようにせねばならぬのである、どうしたならこの暗、動二性を制御することが出来るかと云ふに、是れ亦自己向上の理想に對照し自ら耻ぢ自ら勵みて善性に立ち反りて良心の制裁を鋭敏にしなくてはならないのである、善性の多い人は君子であつて暗性の多い人は愚夫である、動性の多い人は目的なくして動いて居る人である、この配合によつて人格が定まるのである、三性の調和を計るのは克己心の修養である。

## 克つべき己とは何ぞや

克己は人間の精神修養の骨髄であるが、己に克つと云ふその己といふ

ものは果して何を意味するかといふことを今少し吟味して見たいと思ふのである。

先づ我々の個人を形造つて居る本源を指して己とするのであるとして見れば、之は「我」といふ者である、されど「我」と云ふ語は種々の意味に用ゐられて居る、第一自己を指して「自我」といひ、又宇宙の本體を指して「大我」と云ひ、又我々の「我執」といふ者を指して「唯我」といふ者との三種ある哲學などで我を説く時には重もに自我か若しくは大我がである、宗教で説く我は重もに我執であつて、無我といふのは即ち此の我執を除くといふとである、我執とは我意、我慢、我慾などを總稱していふのであつて、我の利己的表現を指すのである。

我執の方は重もに情に屬するもので、自我、大我の方は重もに情を離れた我々の本性で寧ろ智に屬する方の側である、印度ではこれを説くの

になか／＼巧妙な譬諭を用ゐて居る、一體我々は何の光に依つて活動して居るかと問ふと、太陽の光に依つて活動して居る、太陽のない時は月の光に依つて活動する、月の光もない暗夜であれば何の光に依つて活動するか、その時は火に依る、火もない時は何の光に依つて活動するか、響きに導かれて活動する、音響も光明もない眞暗黒であつたならば何に依つて活動するか、その時こそ我の導きに依つて活動すると説くのである、この時は自我自照の時であつて我々の本性が活動する時で我々の良心が働く時である、俗に云ふ、寢醒のわるい時で如何なる暗愚のものも悪動のものも善性の呵責に逢ふて廣い天地に身を置く所なきように感ずる時である。

## 克己の眞主義

この場合の我といふは自己には相違なきも俗にいふ良心であつて、先づ我々の理性と言つて宜いものである。

我々は生得の智と後得の智との二つを有してゐる、この生得の智の方は正しく云へば慧であつて、天に近い方で心の奥の院である。

後得の智は一般の智識であつて外界から學んで得る智識である、又我々の情は善性の發動であつて即ち生得の情である、これは天に近い方である。五感に依つて發動する處の情は實は情ではない慾である、これは外界から催ふされるもので淺薄なものである、此の根本の情と枝末の慾とは同じ系統であつて、常に相争ふて居るのである。根本の情は孟子の所謂性善であつて良心の方に屬し善性が發動して同情となつたのであるが、枝末の慾はその情に使はれて居り乍ら常に謀反を企て、居るものである、心の戦争を休息なしにやつて居る、それと同じやうに

生得の慧と後得の智とは同じ系統でありながら、然も時々相背反する傾向をもつて居るのである、根本の慧が正義を爲せと命じても、枝末の智は利己主義から割出して却て不正の事をする今己に克つといふその「己」といふのはこの中でどれを指すのかといふと、この根本の情、根本の慧の己を指すのでなくて、その發動の如くに見えて、然もその根本性に背反して居る迷妄の慾と、迷妄の情とに打克つといふのが克己の眞意義である。

### 一人の知己

人間は恒に二種の生存を有して居るものであるといふとを忘れてはならぬ、物質的生存と精神的生存との二つである、我々の物質的生存は食物に依つて保たれて居り、又これに系統を引いて居る處の金錢その

他重もに五感の慾望に依つて維持せられて居る、精神的生存の食物と云ふものは何であるかと云ふと、我が本然に有して居る處の「知りたい」と云ふ心と「知られたい」といふ心の満足である、この知りたいは即ち慧の働きてあつて、知られたいと云ふ心は情の働きに屬するものである。人間が相互に「知りたい」「知られたい」と云ふ二つの心の交換が即ち所謂人間の交際である、「知りたい」といふ心が物に對するといふと、これが即、自然科学(動物、植物、化學、物理)となり、これが心の働きに對したものが精神科學(歴史、倫理、哲學、心理)となつて居る。

「知られたい」といふのは他に對して同情を求めるのである、自己の眞價を人に知らしめんとする心であつて、同時にまた知らせたいと云ふ心である、この知りたいと知られたいと云ふ二つが常に満足して行けば人間の相互の間に平和が維持して行かれるのである、互に知て満足し

知られて満足するこの満足が即、精神的生存の食物である、人は多くの人に廣く知られるよりも一人の人に精細に知られるのが肝要である、殊に實業に従事するものなどは一人の眞の同情者を得れば一生は安んじ暮らせるものである、何となれば眞の同情者は一人あれば直に百人千人となるのである、人生一人の知己もないと云ふことは實に寂寞たる生活となり、一生は涙の歴史となるのである。

### 小意志と大意志

情といふのは我々の感應性であつて、慧と云ふのは覺知性である。覺知と云ひ、感應と云ふのは、主觀客觀の相對の間に行はるのであつて、總べてレシプロカルのものである。

金子三四郎君は、「相互」の間に神を認識し、眞理の存在を認めると云ふの

て、常に相互主義を主張して居り、自ら相互と云ふ新聞を發行して居る人であるが、これは理由のあるとて、我々は相對の間に絶對を認め得るのであつて、相對以外には我々の智も情も及ばないのである。

この相對の知りたい、知られたいと云ふ心の及ぶ範圍が即、生物界である、動植物界にも無論この心は及ぶけれども我々人間同士の間にも殊に「知りたい」と知られたいといふその「たい」の意義を最も廣く擴張するがと出来るのである、この「たい」は即、我々の意志である、一事一業に熟せんとするは「知りたい」の結果であり、功成り名を顯はさんとするは知られたいの結果である、そこで我々の意志は慧の方面も情の方面も、總括してこれを希望とし、理想として常に實現せんと欲して居るのである、この意志の中に目的の小さい意志と、目的の大なる意志とがある、大意思は理想として耻かしくないが世には小意志を理想として安樂に

したい贅澤がしたいと云ふ物質的生存の小満足を目的とする卑劣漢が多い、この小意志を捨て、大意志の實現を計ると云ふのが即、克己の根本の思想でなくてはならぬ、我々の個人的生活の上で言つて見れば、五感の慾は小意志であつて、根本性の満足する意志は大意志である、國家的生活の上で言つて見れば我々個人若くは一家族の意志は小意志であつて、君國の意志は大意志である。

そこで人間生活の上では常にこの二通りの目的を有して居るものであると云ふとを忘れてはならぬ、常に小意志を捨て、大意志を捉えろと云ふとが精神修養の中心である。

### 自己犠牲

耶穌教でも自己犠牲と云ふとは最も高尚な道德であるが、佛敎でも自

己犠牲は中樞の道德である、國家教育に於ても自己犠牲と云ふとは最も樞要の教である、工藝實業教育に於ても自己犠牲は克己心の發現であつて最も必要である、併し根本の趣意は各々相違して居る、耶穌教の献身的思想は神に對する献身である、佛教の献身的思想は生類に對する慈悲の献身である、日本の献身思想は君主に奉ぐる献身思想である、實業界に於ける自己犠牲はその業務に對する献身思想である、各々の趣は異なつて居るが、要するに個人と國家との差はあつても、小意志を捨て、大意志を存すると云ふとは中樞の目的である。

歐羅巴の意志を主とせる哲學はシュッペンハウエルが印度の思想をもつてその哲學を組織したのが初めてである、その以後は一般に意志が哲學研究の中心となつたのである。

その中意志を肯定すると、意志を否定するとの二潮流があつて、意志を

否定する方の側は小意志を捨て、大意志の満足を得んとするのであるが、肯定の方に屬する人は我々個人の本能を本位として活動せんとする一派であつて、意志本位説、本能主義、自然主義などは皆この潮流から出て來るのである、併し我々が見て以て本能なりとして之に依つて活動せんと欲して居るものは、或は既に迷妄の雲に蔽はれた本能であつて、時に依ると濁りのついた煩惱であるかも知れぬ、遂に五感の小意志を満足せしめんと欲する所謂自然主義のやうな墮落傾向に向はしむるともある。

かう云ふ風に總ての感官的慾望、迷妄的信仰、總ての向下的傾向を避けると云ふことが我々の個人生活に於ける克己心修養の本義である、つまり前に言つた我慾の己に打克つて本然の己に復ると云ふのが克己復禮の本義であらうと思ふ。



## 精神の衛生

以上餘り空論のやうに聞えるが、これを具體的に言つて見れば、つまり普通の人が忍ぶことの出来ないものを自ら忍びて、小意志を捨てると云ふ實驗をするのが第一である。例へば普通に人の説く酒とか煙草とか憤怒とか不平とか云ふ類のものに就て自己を試験して見る事が最も必要である。小意志を捨てる事が出来なければ、同時に大意志を捉えることの出来ぬことは明白であるから理想は實現せられない、つまり克己の試験に落第したものであることを自覺せねばならぬ。自分は學生時代には大酒家と言はれて居たのであるか、これをやめやうと思つて幾度も試みたけれども、なか／＼及第することが出来ないので、同窓の友人を遊説して自らその主張者となつて、反省會と云ふ名

て禁酒會を起して相互自然の制裁に依て遂に全く喜んで禁酒し得ることが出来た、此時には自ら雑誌を發刊してその趣旨を鼓吹して居た、その後身が即ち今の新公論である。爾來全く酒を飲まなかつたこと十年間であつた、その功に依て今では飲むことは間々あるが酒と云ふものは自分の生活に於て必要と感ずる瞬間は嘗つてないやうになつた。自ら煙草を禁じて見てどうしても喫煙しなくてはたまらぬと感ぜらるゝならば、禁煙の必用がある證據である、已に煙草中毒の方に近づいて居るのである、自分は煙草も喫むが唯人と對話して居る間のみで一服せねばならぬと云ふ感じは會てないのである。身體の上でも酒と煙草とは衛生の爲に打勝つ必用があるが、精神の衛生の爲に打勝たねばならぬものも澤山ある、その中で最も打勝つ必用のあるのは不平と忿恨と倦怠とである、倦怠の心は暗性から出るの

ある、もし之が起つたら自己の理想を考へて之を退治せねばならぬ、自ら激勵して動性を喚起しなくてはならぬ、もし忿恨が心の中に在る時には恨みは決して直接に晴らすべきものでないと云ふことを信じて他日間接に之を晴らす時があると云ふことを注意せねばならぬ、心に不平の在る時には常に訴へては決して聞きのあるものでないと思はねばならぬ、内務省で私學系統の高等文官有格者が常に不平を持つて居た時代がある、官學系統者は早く地方へ就職する、私學系統者は何年でも本省に屬官として置かれると云ふ不平は至極尤である、或人が内部の模様を探つて見て呉れと云ふから、内々聞いて見ると罪は矢張り自身に在る、内部では彼れ等は日々不平を云つて居る、そうして勉強はしない、あれては地方へ出してやりそこなうに相違ない、彼等の不平が止んだら地方へ出す積りである」と云ふこととて一方では出さぬから

不平で日々不平のみ云ひ、一方では不平があるから出さぬと云ふ、この間に處する道は一意潜心、義務に忠實なる外はないのである、そこで青年は第一に不平は漏らすべきものではない、忿恨は晴らすべきものではないと云ふことを心得てもらいたい、不平と忿恨と倦怠とは理想を殺す三毒であると云ふことを忘れてはならぬ。

### 常識と信念

人は倫理的常識がなくてはならぬと同時に、宗教的信念がなくてはならぬ、常識と信念とは舟の楫と櫓の如きものである、倫理的常識があつて宗教的信念がないと理想が低い方に向つて行く恐れがある、とかく人が物質的生活にのみ傾く恐れがある、宗教的信念がなくては精神的生涯は完全しないのであるから、實業界に活動する人は殊に宗教的信

念の光明に依て生々するの必用がある、その宗教的、信念は迷信を離れた純白の信念でなくてはならぬ、殊に日本の實業界は實業道德の低度なのに依つてどれほど障害を受けて居るか知らない、随分常識のありさうな實業家は多くても大切な時に善性が働かない人が多い、一般に純白なる宗教的、信念に依つて善性の能力を有功のものにせねばならぬ、既成功の實業家には自分に眞の信念がないから、宗教などは實業には關係はない」と公言する馬鹿者も居る、併し今後の實業界は斯る盲目の先達の導きに随つて居つてはならぬ、大空に飛躍せんとする鳥には兩翼が必用である、實業界最後の活躍は常識信念の兩機能を備へた人の手に落ちるのである、之が即、理想の實業家である。

明治四十二年十一月五日印  
 明治四十二年十一月九日發行

不 許 複 製  
 定 假 七 十 錢

著 作 者 高 楠 順 次 郎

發 行 者 高 島 太 圓

印 刷 者 佐 久 間 衡 治

印 刷 所 英 舍

發 行 所

東京市小石川區原町二丁目六十八番地

丙 午 出 版 社

ローナー、フアイト氏原著  
東洋大學講師 中島健藏先生述

◎**解説倫理學原論**

定價金五十五錢  
郵税金八錢

ローナー、フアイト氏の「倫理學原論」は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みしものにして理論的に卓抜の見込みのみならず又當時社會の實際問題を捉へてこれに明快なる解答を與へし一新好著なりこれを以て吾國にても大島學士の翻譯によりて已に紹介せられたるあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾とし是が解説を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各章の順を追うて殆ど各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を窺はしめむと力め且つ譯過筆録の際卑見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり 述者敬白

文學博士 松本文三郎先生著

◎**宗教と哲學**

定價金四十五錢  
郵税金八錢

本書全篇十有餘章まで筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教と道德研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得むなり

東洋大學講師 釋清潭先生著

◎**寒山詩新釋**

定價金五十錢  
郵税金八錢

是か佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ佛語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者情深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目に於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

文學士 渡邊又次郎先生著

◎**最新論理學**

定價金一圓廿錢  
郵税金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔平易なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

高島米峯先生著

◎**理想的商業**

定價金二十錢  
郵税金貳錢

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎**小泡十種**

定價金四十五錢  
郵税金八錢

博士の學殖富饒に博士の見識卓越に博士の文章超凡なる世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此者を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩渺盡きざる大河となり散じては縹緲限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著也

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生著

◎**達磨と陽明**

定價金七十五錢  
郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり

文學博士 井上圓了先生著

◎**西航日録**

定價金三十錢  
郵税金四錢

是れ井上博士の洋行土産也歐米に於ける教育宗教文學政治經濟等の現況は博士が周到なる觀察と輕妙なる文辭とによりて此に躍動す征露の戰爭に於て武名を世界に輝したる日本の國民は又世界の大事に通じざるべからず請ふ一本を購へ

前文部次官 澤柳政太郎先生新著

◎**退耕錄**

正 定價金壹圓  
郵税金八錢

著者の序文に曰く「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙に腹ふくるも心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實際上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなるを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焔あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國啓世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

スタンフォード大學總長 ヴォルダ博士原著

◎**人物の修養**

定價金五十錢  
郵税金八錢

澤柳前文部次官特長文の序を草す其の一節に曰く「ヴォルダ博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるる紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を待たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情を喪し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

東洋大學講師 境野黃洋先生著

◎增補聖德太子傳

定價金五十五錢 郵税金八錢

佛敎史家として夙に令名ある境野先生が其の燃辱なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛敎の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政敎習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所。

マクス、ミユラー博士原著

佛敎大學教授 文學士清水友次郎先生譯

◎宗敎學綱要

定價金五十五錢 郵税金八錢

清水學士佛敎大學に教授として宗敎學を講ずるや近代稀有の宗敎學者マクス、ミユラー博士の原著を譯本とし隨つて譯し隨つて敎ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗敎學書としては唯一無二の良書なり。

◎月刊聖德

一部三錢 郵税金五厘 雜誌 一ヶ月分 郵税金三十錢

毎月一日に發行する施本用の雜誌であります宗敎道德等に關する名家の講演を筆記して掲載致します 價を安くし内容を多くして成るべく多數の讀者を得て讀る文藝傳道の實を擧げたいと思ひます

慶應義塾大學講師 忽滑谷快天先生評釋

◎和漢名士參禪集

定價金五十五錢 郵税金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡張翥等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且つ和漢禪匠に關する逸話笑談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の禪儒碩學と禪を商量し名僧大德の錯雜に接するを得しむ。

第三高等學校教授文學士野々村直太郎先生著

◎宗敎と倫理

定價金五十錢 郵税金八錢

正にこれ新宗敎論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との渴に悩めるもの知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗敎と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗敎論を評す。

ア、エフ、ステンツラー先生原著

◎梵語入門

定價金八錢 郵税金八錢

歐亞言語の源泉を窮めんと欲する人は梵語を學ぶべし宗敎の千態萬狀を知らんとする人も梵語を學ぶべし東亞文明の根據を探らんとする人も梵語を學ぶべし我邦一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は咸に歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐる人は第一歐語を學ばざる可からざる不便あり第二價格低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

高楠順次郎先生序 阿彌得壽先生著

◎悉曇阿彌陀經

定價金八圓 郵税金八圓

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大衆經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡げんが爲めなり梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚註には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本辭書唐桑二譯を掲げたり學者此の書に依れば悉曇の一端を窺ふに易からん

獨逸哲學博士カール、ケーラス先生著

◎阿彌陀佛

定價金廿五錢 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛敎の根本問題也ケラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀界に好評噴々たるも弊社發行十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に關ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之先生著

◎迷想的宇宙觀

定價金七十五錢 郵税金八錢

是に「吾國體と基督敎」を刊行せし以來其の批評續々として既に數十種に上れり仍て今般その批評に對して更に批評を試み且つ簡單なる二大問題を擧げて讀者に其の解答を乞へり基督敎が迷信なりや否や又吾國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるゝを得べしと信ず大方の君子重ねて批評せらるゝこともあらば幸甚 著者敬白

高島米峯先生著

◎一休和尚傳

定價金四十五錢 郵税金八錢

新公論社編 ○附録學生館夏法

◎男女學生氣質

定價金二十錢 郵税金二錢

此書は坪内雄藏、柳橋潤子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山崎ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、本多庸一、南條文雄、小杉天外、山縣佛三郎、前田懸雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯邊瀧一、戸川殘花、鈴木秀太郎、石黒忠恵、速塚麗水、中川謙次郎、南岩倉具威、柳橋一、寺田勇吉、フオスター、坂本盛徳、加納久宜、古川流泉、田中浩六、加藤唯堂、境野黄洋、中島徳藏、下田次郎等の大家が現代男女學生の長短兩方面を觀察しその長所を助けその短所を補ふべき方法を示されたるものなり

文學博士 村上專精先生著

◎自 信 錄

定價金五十錢 郵税金八錢

これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節既いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著

◎誠のしるべ

定價金四拾錢 郵税金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらるる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著

◎女 性 訓

定價金四拾錢 郵税金六錢

本書の内容は天職中庸實素謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を擧み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女ならむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

文學博士 村上專精先生編

◎原 人 論

定價金十二錢 郵税金二錢

◎註大乗起信論

定價金十六錢 郵税金二錢

右の二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書學會の購本として最も適當なり

◎人生問題

定價金五十錢 郵税金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に邁着して疑問の源泉を探り大に其深淵を得て茲に此書あり疑る所の神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑むる人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と滿足と活力とを得て温く且つ光ある人生に屬することを得ん

東京帝國大學講師 文學士 常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳

定價金七十錢 郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神祕なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖も是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意識を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起源を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り著者常盤大定先生夙に佛學能文を以て著るに佛傳の研究に従ふものこゝに年あり此著の價値識し推知し得むか

◎淨土教史論

定價金六十錢 郵税金六錢

精確なる史料により明透なる説見を以て前人の等閑に附したる印度に於ける淨土教の淵源を究尋して東漸以來二千年の問誤傳せし歴史の謬見を破し佛敎歴史の眞相を顯彰し大乗非佛敎問題に疑案を下したる空前の研究なり眞佛敎これによりて紛碎せられ眞佛敎これによりて躍如たらん舊佛敎これによりて假面を纏がれ新佛敎これによりて光輝を放たむ請ふ精讀を賜へ

前外務大臣 伯爵 林董先生著

◎修養の模範

定價金七拾錢 郵税金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに對し寺院や教會では辯士が引用する美談の乏しいのに對り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の奇譚の少ないのを歎いて居る著者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を翻譯摘録して送るにこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することゝなつたのは實に無上の光榮である

界利彦、藤近運平兩先生著

### ◎社會主義綱要

定價金四十錢 郵税金八錢

近時社會主義の理論及運動は頗る世人の注意を惹くに足るものありき雖も未だ其學說の概略をも窺ふことなくして徒らに附和雷同するもの或は輕々之を攻撃するもの頗る多く殊に多少の教育ある人士にして社會主義に對して評論を試むる者の如き其無知實に驚くべきものあり然るに此等人士の一讀すべき邦文の修冊極めて少なく偶々之あるは二三の翻譯と時事に對する社會主義者の評論に過ぎず科學的社會主義の原理各問題の解釋其史的發展及現今の諸潮流に就いて系統的に敘述したるものに至つては絶えて之あることなし著者此缺陷を補はんとして筆を執り平易簡明の文を以て深遠なる學理難解なる問題を解釋したる者即ち此書なり特に反對論に對する辯駁と社會主義運動の現状との二章は斯主義に對して毫も興味を有せざる人と雖も見落すべからざる處なり今や燈下靜思の好季社會各階級の人士に向つて此書を薦む

加藤唯堂先生著

### ◎宗教的修養

定價金二十錢 郵税金二錢

楚人冠、杉村縱橫先生著

### ◎七花八裂

定價金六十錢 郵税金八錢

著者曰く此書は著者が名に畏れず戀に泣かず半錢の債を負はず半個の籠に屁はれず天上天下一點半畫も他の掣肘威壓を受くることなくして縦に我が見待底を披瀝せるもの過去十三年間の惡文惡詩收めて此の一卷の中に在り著者の如く貧乏し著者の如く墮落せんと欲する者は請ふ此書を讀め

ペーケマン先生原著 杉村 縱橫先生譯補

### ◎改訂強肺術

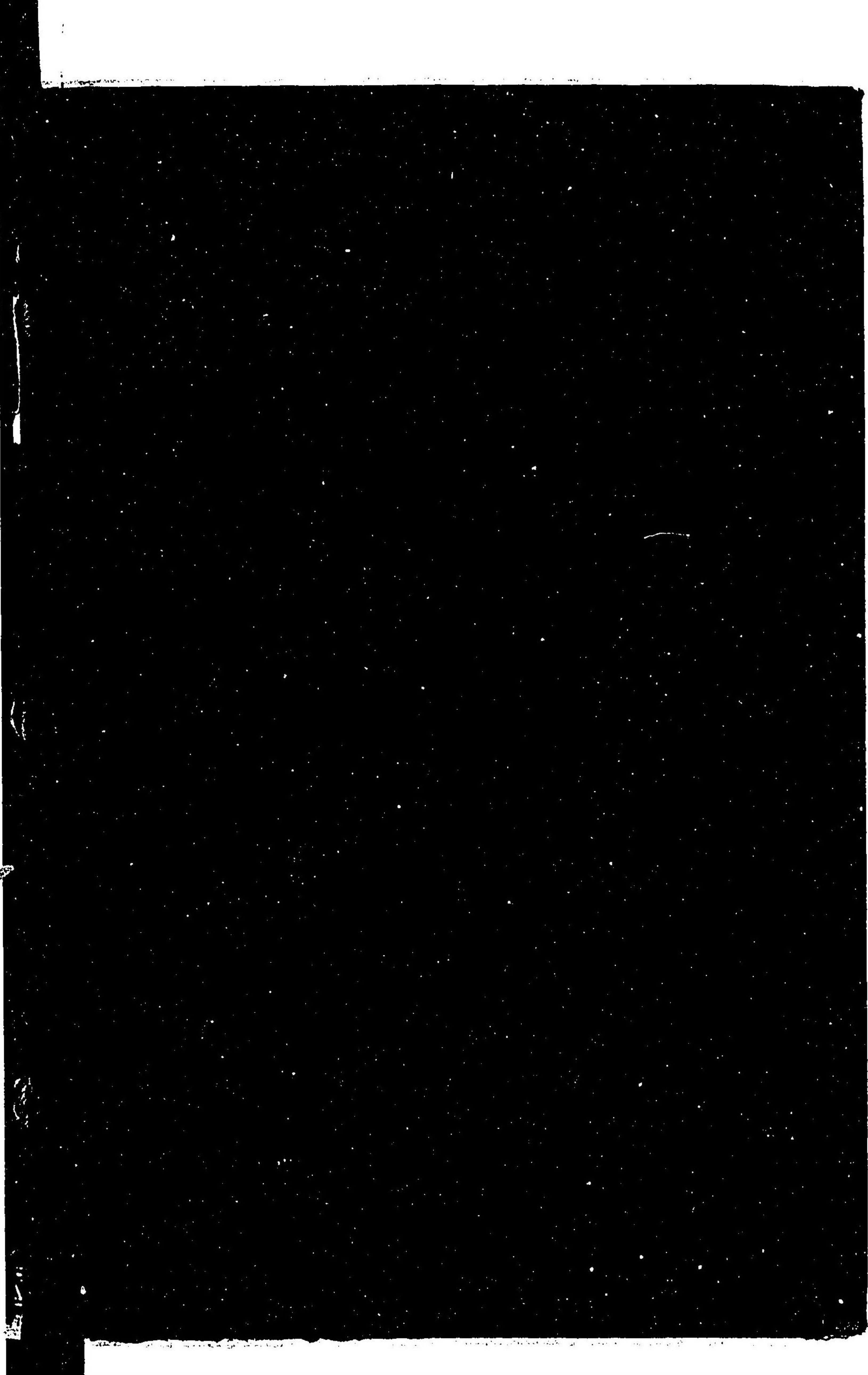
定價金四十錢 郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め肺病に罹れるものは讀め歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め此書に六の特色あり

- 第一、時間を要せざること
  - 第二、費用を要せざること
  - 第三、場所を要せざること
  - 第四、勞力を要せざること
  - 第五、言文一致なること
  - 第六、徳ふり假名付なること
- 故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に實行し而して確實に其功を收め得べし

325
93





325  
93

013584-000-7

325-93

国民と宗教

高橋 順次郎 / 著

M42

ABA-0052



